近世・近代における話題転換語の「登時・登下/ 當下」について*

羅工洙**
gsna@ynu.ac.kr

〈目次〉

1. はじめに	3. 「當下」について
2. 「登時・登下」について	4. おわりに

主題語: 話題転換(Topicconversion)、登時・登下・当下(Tou-ji,Tou-ka)、唐話学(Chinese Study)、漢字表記(Chinese Character)、江戸・明治(Edo-Meiji)

1. はじめに

近世・近代における話題転換語については、何回かにわたって考察したことがある。話題転換語とは、文字通りある場面の話題を他の話題に移すときに使うもので、その例は実に多い。「さて、かくて、さるほどに、ときに」などのように、純粹の和語やそれにまつわる漢字表記のものもあれば、中国俗語(白話語彙)のものも少なからずあった。筆者は、中国俗語由来の話題転換語に関し、『八犬伝』¹⁾では種々の語について、各論としては「却説」²⁾・「話説・説話」³⁾・「閑話休題」⁴⁾・「再説・且説」⁵⁾・「その他諸相」⁶⁾について考察した

* 本研究は2014年度嶺南大学第1次校費支援により作成された。

** 嶺南大学 日語日文学科 教授

- 1) 羅工洙(2005a)「馬琴作読本における中国俗語的話題転換語」『日語日文学研究』第53輯、韓国日語日文学会、pp.97-120
- 2) 羅工洙(2005b)「日本における中国俗語的話題転換語『却説』」『日本語文学』第26輯、韓国日本語学会、pp.41-66
- 3) 羅工洙(2006a)「近世・近代における『話説』と『説話』」『日語日文学研究』第56輯1巻、韓国日語日文学会、pp.279-302
- 4) 羅工洙(2006b)「日本における『閑話休題』とその周辺」『日本語文学』第29輯、韓国日本語学会、pp.21-45
- 5) 羅工洙(2008a)「日本の近世・近代における『再説』と『且説』」『日本語文学』第37輯、韓国日本語学会、pp.41-60

ことがある。各語は全般的に訓読が大部分であり、音読みの場合はそう多くない。これらの語は話題轉換の役割を担っているという点では共通しているが、意味や用法の上で異なりを見せていた。「その他諸相」の考察からは、「話分両頭・不在話下・不題・按下・話休絮煩・話表・単題」など数多くの語が近世・近代の日本文学に用いられていたことが分かった。また、こうした話題轉換語の種々の語は、中国俗文学(白話文学)に用いられた語であったことも明らかにした。しかし、話題轉換語の中にはいまだに問題として残されている語があり、考察の余地があると思われる。本稿で取り上げようとする語は、主として「そのとき・そのかみ」の訓を持つ「登時・登下・當下」である。同じく話題轉換の役割を担っているにも拘らず、低頻度の語であったためそれほど注目をあびていなかった語であった。資料の調査を進めた結果、「登時・登下・當下」の語も日本文学の中で重要な漢字表記の役割を果していたと思われ、機会を得て考察することにした。

話題轉換語に関連しては、唐話辞書の一種である『水滸伝字彙外集』(写本、未詳、『唐話辞書類集』13卷)に「水滸讀格」という項目があって、種々の語が載せられている。例を見ると、次の通りである。

話説 ワセツス。爰ニ又。カクテ昔ノ話ヲ説出ス

却説 去程ニ。爰ニ又。サテモ又 却説 ソレハサテヲキ。爰ニ又

且説 爰ニ又。サテモ。カクテ。去程ニ

再説 爰ニ又。サテモ

只説 サテモ 只説 ソレハサテヲキ ココニ又 只説 ソレハサテヲキ。爰ニ又

不説 某某 且不説 某某

當下 其トキ

當時 其トキ

不在話下 ハナシコノ下ニナシ。コレハサテヲキ。コノ末ハナシアラズ。コレハコレマデ。コノ下ニハナシナシ

話分両頭 ハナシフタツニ分ル。ハナシフタミチニ分ル

閑話休題 閑話少説 ムダバナシハサテヲキ。ムダゴトハウチヲキテ云ズ

話休絮繁 話不絮繁 ワズラワシク記サズ。ムダハナシハサテヲキ

不題話休絮繁 事ノシゲキヲシルサズ

按下不題

6) 羅工洙(2008b)「近世・近代における話題轉換語の諸相」『東北亜文化研究』第17輯、東北アジア文化学会、pp.357-382

闊過不題 コレハサテヲキ

放下一頭去説 コノカタカタノ話ハサテヲキ。カクテ。ソレハサテヲキココニ又

話中不説 某某

休説 某某 却説

畢竟 ツマルトコロ。ドドノツマリ。ヨンヅマリ

正是 イカニモ

且聴下面分解 先ツ下面ノ分ガイヲキケ。マヅ次ノ段ニトキワクルヲキケ。ソワ次ノ巻ヲ読得テ
シラン

且把間話提過只説正話 ムダバナシハサテヲキ、サテモ7)

中国俗文学においても様々の語が存在し、語によって意味も異なっていることが窺われる。筆者の先行研究では、上に提示された例以外にもっと多様な例があった。勿論、中国俗語由来のものであり、それが日本文学にも用いられていたことは特異な現象であった。

上の例のうち、本稿で取り上げるのは「當下」である。この「當下」と似ているものに「當時」があり、「水滸読格」にはないものの本稿で扱うことにしたのが「登時・登下」である。前言したように、これらの意味が「そのとき・そのかみ」となっていることから、非常に類似性を持つ語であるといえよう。このうち、「當時」は現在も漢語として生き残っており、使用上の歴史も長いので考察の対象から外すことにする。ただし、「當時」にも話題転換語としての役割もあるということだけは述べておく。考察の際は、個別的な展開を把握したあと、「おわりに」のところで各語についてまとめたい。

この研究により、唐話学による中国俗語受容の実体の裏付けが一層進むと思われる。當時の日本人の筆記活動や漢字表記の多様性には中国語の影響も大きいということを証明したい。特に異質な漢字表記を岡田袈裟男は「レトリック効果」であるとし、「漢語語彙は知識、教養階級のファッション感覚に貢献してきた」⁸⁾としている。それほど近世の中国俗語の援用が多かったということであろう。のみならず、各語の歴史的な展開も把握できよう。つまり、言葉の受容、展開、消滅に至るまでの過程もある程度明らかになると思われるのである。

7) これについては、羅工洙(2005a)で紹介したことがある。

8) 岡田袈裟男(2006)『江戸の翻訳空間』笠間書院、pp.217-219

2. 「登時・登下」について

『大漢和辞典』で「登時」を引くと、「只今すぐに。即座に。即刻」の意味が與えられていて、唐以後の例が載せられている。『漢語大詞典』には、①「立即；立刻」の例として晋以後の例が、②「當時」の意味は宋以後の例が載せられている。このことから考えてみると、「すぐに、即刻」のような意味が先に用いられ、後に「當時」のような意味に変わっていたのではないかと推測できる。この語は日本にも早い時期から受け入れられている。この「登時」については、松尾良樹⁹⁾の言及がある。『日本書紀』に「登」があり「古訓スナハチが適切であること」とし、「神田氏の書に詳しい」とゆずり、『変文集』では「登時」が15例あるとしている。これについて、鈴木真喜男¹⁰⁾は『日本書紀』に現れている「登」が「登時」であるということに反論も提示している。また、鈴木は『讚岐典侍日記』に現れる「たうじ」の漢字表記に関し『日本古典全書』の注に「登時」と当ててあることについて「當時」ではないかと疑問を抱いているが、音韻論的な問題は本稿における関心とは異なるので考察対象には含めないことにする。松尾良樹¹¹⁾は、さらに『万葉集』を考察し、「登時」が7例現れすべて「すなはち」と訓じられていると述べ、日本にも早い時期から用いていることが分かった。

香坂順一¹²⁾は「登時」について、「“登”に時間を表す“時”を複合させたもの」で「直ちに」や「その時」の意味に用いられる例が見られるとしている。「當時」については、「“當時”は“時”を言わずに“立刻”“馬上”の働きをする」としている。「登時・當時」は「敦煌変文」にも多数見られ、『水滸』以前に話し言葉で定着していたとも述べている。香坂によれば「タダチニ・即座ニ」などと「ソノトキ」とは意味が異なるので、厳密には二つの意味用法があることがわかるだろう。

『日本国語大辞典』(第2版、以下『日国大』と呼ぶ)を調べてみると、「すぐに。即時に。即座に」とあり、『万葉集』(759)『本朝文粹』(1060)『讚岐典侍』(1108頃)『随筆・乗燭譚』(1729)『米欧回覧実記』(1877)の例が載せられている。『日国大』では「ソノトキ・ソノカミ」のような意味は與えられていない。小田切文洋の『唐話用例辞典』¹³⁾に「登時」の項目があり、「スグサマ、タチマチ」の意味を與え、『水滸伝』や『唐話辞書』『松浦佐用媛石魂録』(1808)『開卷驚奇

9) 松尾良樹(1987)『『日本書紀』と唐代口語』『和漢比較文学』3、p.6

10) 鈴木真喜男(1976)『「登時」と「當時」と「輒時」—讚岐典侍日記のばあい—』『東京学芸大学紀要』第2部門 27、pp.170-178

11) 松尾良樹(1986)『『万葉集』詞書と唐代口語』『叙説』13、p.8

12) 香坂順一(1987)『《水滸》語彙の研究』光生館、pp.232-234

13) 小田切文洋(2008)『唐話用例辞典』笠間書院、pp.119-120

侠客伝』(1832)『朝顔日記』(1811)『北里懲毖録』(1768)『春風情話』(1880)の例を挙げている。しかし、これらの作品の訓には「ソノママ・ソノトキ」もある。

このことから考えてみると、日本ではかなりはやい時期から用いられた中国の口頭語であったことがわかる。特に近世の唐話資料に多く、読本の世界にも浸透していたことが窺われる。ここでは、近世や近代の資料を中心に、どのような文章で用いられていたのかを具体的にみることにする。

では、まず中国資料と「唐話辞書」類を見てみよう。

那桶酒登時喫尽了。(『水滸伝』第16回)

登時^{チテ}就得^{コリ}病上^ニ牀、不^{タラ}勾^ニ七日^ニ、(『小説粹言』平安癸疑主人訳、宝暦8年、東北大学図書館蔵本、p3ノ6)4例

巴不得^ニ登時^{ステ}撇^マ了王家^ヲ。(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p154)3例

該地方官不^テ敢^セ遲慢^シ登時^シ起^マ了批文^ヲ。(『五色石』服部無松訓訳、明治18年5月、国会図書館蔵本、p4ノ17)4例

性命^{ソノトキ}登時^{チン}就^チ送^ヒ若報^テ得^{カラバ}厚^ハ他^ハ。(『勸懲繡像奇談』服部無松、明治16年6月、国会図書館蔵本、p3ノ18)2例

周司教聞知。登時^{タダチニ}氣死。(『今古奇観』宮原民原、大正15年、支那文学大観11、p60)2例

並不^{ケンテ}會^ニ費^ス一^{コシ}些^シ氣力^ヲ。登時^{タチマチ}把^バ權臣^ニ勢家^ニ。鬧^{サワガシキ}洪^ニ洪^ニ的^ニ箇^ニ戲^ニ場^ニ。(『桃花扇』塩谷温註、大正15年、支那文学大観6、p9)2例

朔日今朝。眼下心前。陽臺一座登時^{タダチニ}變。(『牡丹亭還魂記』鈴木彦次郎共訳、支那文学大観3、p69)

日本で多く読まれた中国の俗文学に現れていることから、基本的には俗語的性格を持つものといえよう。その読みは「ソクジニ・タダチニ・タチマチ」とあって、瞬間的に行われる話の展開があるときに用いられる語であることがわかる。しかし、先稿で調べたように、中国俗文学では「話説」「却説」「且説」のような語などに比べると、相対的に多用されていたとはいいにくい面がある。ともあれ、中国俗文学に現れていることで「唐話辞書」にも登録されている。

『俗語解』(刊行年間未詳)

登時 東涯曰律ニ登時ト云コトアリ即時ト云コトニテ其俛ト訓ヘシトスウ

『兩國譯通』(刊行年間未詳)

テンスウチウライ
登時就来(タダイママイラフ・ヤガテキタル)

『学語篇』(大典禪師著、明和9年)

登時

『雑字類編』(柴野栗山原撰、天明6年)

ソノカミ
當時。當昔。當初。初時。

ソノママ
登時。就時

『應氏六帖』(伊東東涯編、写本)

ソノママ
登時

ソノママ
登時 吳書一登時出其母

『訳通類略』(明治年刊写本)

孰時 ソノトキ 登時 同

『雅俗漢語訳解』(市川清流、明治11年)

トウジ
登時 文選注即時也、～

『小説字林』(桑野銳、明治17年)

トウジ
登時 ソクジ

『魁本大字類苑』(谷口松軒編著、明治19年)

ソノトキ
登時、就時、即時、當下。

『支那小説字彙』(藤井理伯算輯、明治43年)

トウジ
登時 ソノママ、即時ナリ

『諸録俗語解』(波多野太郎、1960年)

登時 當時ト同ソノトキト訳ス又タチマチトモ訳ス

『禪録慣用・俗語要典』(柴野恭堂、1980年)

『羅湖野録』 登時 當時と同じ。その時と訳す。また「たちまち」とも訳す

このように、「登時」は多くの唐話辞書に登録されている。音読み「トウジ」のほか、「即

時・ソクジ・タダイマ・ソノママ・就時・ソノトキ・當下・當時・タチマチ」のように類似性のある実に多様な意味を當てていることがわかる。今回取り上げる「當下」と同じ意味であることも分かる。『羅湖野録』は中世の禪家で読まれたもので、仏教の禅僧の口頭語としても用いられていたことが窺われる。この外に、近世に人気のあった『水滸伝』に現れた語を収集した辞書にも見られる。

『忠義水滸伝解』(陶山南涛、宝暦7年)

ヲシケケコウ
登時結果 即坐ニ殺スナリ登時ハ文選秦彈劉整登時トアリ俗語ナレトモ梁ノ任彦升已ニ 用ル
カラハ古キ俗語ト見ヘタリ

『忠義水滸伝』(享保12年)

登時結果 ソノトキコロス

ここでも「ソノトキ・即座ニ」と意味解釈をしている。特に『忠義水滸伝解』には、「俗語」ではあるが「古い俗語のようにみえる」とあることから、かなり長い間用いられてきた俗語であることが窺われる。この「登時」は、日本での使用が古いためか「唐話辞書」以前の辞書にも現れている。

『前田本色葉字類抄』(1144—1145年、橘忠兼)

登時 元程詞

『黒川本色葉字類抄』(江戸時代書写)

登時 元程詞

『弘治二年本節用集』(1556年)

トウジ
登時

『永禄二年本』(1559年)

トウジ
登時

『画引早引自由熟字在』(大館正材編輯、明治11年5月、明治期漢語辞書大系34、p203)

トウジ
登時 ソノトキ

『掌中両引布令必用普通漢語解』(大館正材編輯、明治11年6月、明治期漢語辞書大系35、p103)

トウジ
登時 ソノトキ

『必携熟字集下』(村上快誠、明治12年5月、明治期漢語辞書大系38、p52)

^{トウジ}
登時 ソノトキ

『懷中漢語字引大全』(大館利一、明治14年7月、明治期漢語辞書大系40、p207)

^{トウジ}
登時 ソクコク

『明治いろは字引大全』(内藤彦一、明治15年3月、明治期漢語辞書大系41、p313)

^{トウジ}
登時 ソノトキ

中古の末期に書かれた日本語辞書である『色葉字類抄』に見られるので、日本においては早い時期から日本人の眼に触れていたものと思われる。また、中世の節用集にも見られる。しかし、近世の『合類節用集』(1680年)、『書言字考節用集』(1717年)には「當時」はあるが「登時」は登載されていないのが特徴である。一方、明治期に数多く刊行された漢語辞書を調べた結果、いくつかの辞書に「登時」の例が見られる。すべて音読みをし、「ソノトキ」と「ソクコク」の意味を與えている。

このように、中国俗文学や唐話辞書、日本の古辞書、近代の漢語辞書にも見られ、中国俗語が日本語に深く浸透していたと思われる。それでは、実際の文学作品ではどうなっているのかを見てみよう。

^{ソノママ ヨ} ^{フギヤウニ} ^{ヨノノ} ^{ゴハツトキツアル}
登時告 = 知府。那箇法律森嚴。(『北里懲毖録』道凹先生著、明和5年5月、洒落本大成4、7
オ)1例

登時哄騙了許多黄白、(『白話文集』快活痴道人、明和年間?、『中村幸彦著述集』7巻、p1)1例

近世には日本人による白話文学(俗語文学)が刊行されているが、わずか二つの作品にし
か現れていない。しかし、日本人作白話文学に用いられていたということは、當然ながら
「登時」は中国俗語だと認識があったことを意味しているはずである。中国の俗文学を翻
訳した通俗和文には用いられていない。

一方、曲亭馬琴の著作である「読本」類には現れている。

^{そのときげんはち} ^{る、よう}
登時現八思ふやう、「限りある路費をもて、〜」(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩
波文庫本3冊、p298)3冊4例

^{とのかた}又^{はせ}外面^さへ走去りけり。^{そのときいぬむらかくらう}登時^{いぬむらか}犬村角太郎は、(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本4冊、p298)4冊55例

^{そのとき}登時^{たまご}玉五郎は、浮木の媼を見かへりて、(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集83、p61)73例

^{そのときおもや}登時^{まどのあるじ}母屋は逆旅主人に、^を良人^{つと}の病着^{いたづき}恁々^{しかじか}、と告^{つげ}て^{くすし}医師^{もと}を徴めしかば、(『開巻驚奇侠客傳』(曲亭馬琴、天保3年、新日本古典文学全集87、p24)114例

読本の代表格である『八犬伝』には、一部分を調べただけであるにもかかわらず「登時」の例が多数見つかった。筆者が『八犬伝』に現れた話題転換語を考察した際に、実に色々の語を取り上げたが、そのときには「登時」については言及しなかった。音読みの「とうじ」はなく、「そのとき」の訓を当てている。文脈の上から「ただちに・たちまち・即座に」のような意味もなきにしもあらずであるが、それよりは、話の展開の上でそのときにこういうことがおこったという説明を付加するような役割を担っているといえよう。つまり、話題を転換させるような作用をする語である。ただし、漢字表記は中国俗語であるもののふりがなは「そのとき」とあるので、所謂中国語の借用である。

^テ登時^ヲ言^シレ^ト之^ノ為^ニ奇^ク而^シ頃^ハ又^シ～(『江戸繁昌記』寺門静軒、天保3年、東北大学図書館蔵本、p1ノ4)1例

^ニ方^ニ纔^ル得^ル玉^ヲ成^ス登^ニ時^ニ歡^ニ喜^シ眞^ニ做^ル下^ニ得^ル宝^ヲ珠^ノ之^ノ思^ハ上^ニ～(『繁昌後記』寺門静軒、明治10年、東北大学図書館蔵本、p6ノオ)2例

^レ是^ノ個^ノ金^ノ銀^ノ兒^ト登^ト時^ニ不^レ覺^テ仰^ル看^モ恰^ク～(『情天比翼縁』三木愛花、明治17年、国会図書館蔵本、p19)1例

寺門静軒の『江戸繁昌記』を発端とする「漢文戯作」の作品も多数発刊される。しかし、「登時」は寺門静軒の作品のみに見られることから、一般的には用いられなかったものといえよう。三木愛花の『情天比翼縁』は漢文小説であるが、中国語が多用されていて「登時」も見られる。全般的に見れば、特定の作家に限って用いられてはいたものの、援用されていたことは確認されたと言えるだろう。

第十一回 ^{そのとき}登時^{ふたたび}稲之助は再度またお新^{むか}に向ひ言るやう然^{しか}るに～(『鳴渡雷神於新』鈴木金次郎編、明治19年2月、リプリント日本近代文学92、p431)3例

第二五回 ^{このときらうじん}登時^{わらべ}老人は童^{まね}を摩^{くだん}きて件^{をんな}の婦人^{ひきあは}に紹介せ、(『婦女の鑑』木村曙、明治22年1月、明文全81、p233)1例

第二八回 寄語陽和如有意
不妨寒谷與先回

^{登時}婢^ハ右指^ヲ屈^シ思考スルモノノ如クナリイガ漸クニシテ微シク笑ヒヲ含ミ言テ曰ク～
(『慘風悲雨世路日記』菊亭香水、明治17年5月、明文全2、p384)1例

話題轉換語の基本的な特徴は、「章」や「回」が始まる時新しい内容であることを喚起させることが主な目的だということである。上の例のように、「登時」にも「章回」¹⁴⁾の最初に用いられている例も見られる。また、『世路日記』には「回目」¹⁵⁾で用いられた例まであって、次に話題轉換語が出現すると典型的な話題轉換の形式になる。以下は、管見で調べた「登時」の例である。

水ハ躍^{をど}リテ二十丈ノ上ニ噴飛ス、又汽櫃^{きき}ヲ装フタル車アリ、^{とうじ}登時^{オコ}ニ火ヲ熾シテ蒸気ヲ起シ、
(『米欧回覽実記』久米邦武、明治4年11月、新日本古典文学大系5、p148)1例

^{そうにんず}総人数を一度に改選^{かいせん}して次^{つぎ}の国会には^{とうじ}登時^い国民一般^いの意嚮^{かう}と少しも背馳^{すこ}せざる人物而已入り
こむ様に囚ることなり(『国会論』中江兆民、明治21年11月、明文全13、p139)1例

^{そのときまんな}登時^あ万執^{いらへ}は阿と応て身を起し、忙はしく那方に歩を進むるにぞ、(『哲烈禍福譚』宮島春松、明治12年5月、明治文化全集21、p247)1例

^{そのとき}登時^ル「瑠紫^{シイ}、阿朱^ア暹^{シユトン}」は全く自己の心に復り、(『春風情話』橘頭三訳述、明治13年4月、明治初期翻訳文学選、p98)1例

^{そのときのあらし}登時^{おほあぐら}野暴仙吉は知引きまくつて大胡座、泰三をジロリと見やり、(『蓆旗群馬嘶』採霞園柳、明治14年、明治文化全集21、p39)2例

^{おほあぐら}尊吾を導くに如り。^{このとき}登時^{ちつ}旅人は些とも猶^{いう}予せず。(『西の洋血潮の暴風』櫻田百衛、明治15年6

14) 中国俗文学は「章」や「回」で文が構成されているので「章回小説」ともいう。

15) 「章回」の次の小題名のような二行形式のあらすじを「回目」という。「回目」は、その「章回」の内容を含蓄しているのが特徴である。

月、明文全5、p12)4例そのとき、いちじの飢を医すればとてp26。

^{そのとき}登時ピロウは馬を駐め、^{とど}佇立む^{ただす}ピトウに打ち向ひて、(『自由の凱歌』宮崎夢柳、明治15年8月、

明文全5、p36)1例

^{ソノトキ}登時タケハ紅涙ヲ払ヒ菊雄ニ対ヒ言フテ曰ク～(『世路日記』菊亭香水、明治17年5月、明文全2、

p384)2例

オオ^そ其れ其れ其の時^{そのとき}よ登時はしも大兄が奇人に見へしにはあらで～(『巴里情話椿の佛』艸廼戸

主人、明治17年7月、明治翻訳文学全集26、p233)1例

入口の扉も開き放ちてあり^{そのとき}登時ミツセル、フレンチヤはツと進み入り～(『佛乱余聞』無署名、

明治18年11月、明治翻訳文学全集24、p60)2例

^{そのとき}登時お辰と諸共^{もろとも}に先なる船へ乗^さおくれし仲間^{のり}の角蔵^{ちうげん}は～(『権妻お辰』伊東専三編輯、明治19年

2月、リプリント日本近代文学92、p142)8例

『米欧回覧実記』や『国会論』では、「登時」を「とうじ」と読み漢語的な使い方をしている。『日国大』にも『米欧回覧実記』の用例があってその意味を「すぐに。即時に。即座に」としている一方、『米欧回覧実記』の注釈にも「即座に、すぐに」の意味を當てている。『国会論』の例文も、「すぐに。即時に。即座に」の意味になると思われる。一方、音読みされた「登時」の2例は、「そのとき」のように解釈しても別段無理はないように見られる。また、訓読みの「登時」は殆んどが「登場人物」を伴い、その人物に話題を転換させる役割が與えられている様子が明瞭にみられるのも一つの特徴である。

このように、用例としてはそれほど多くないと思われるが、中国俗文学で用いられていた語が近世や近代の日本文学にも用いられていた。日本での歴史は深く、最初は「すぐに、即時に、即座に」のような意味で用いられていたものが、近世以降は「そのとき」という話題転換語としての意味で用いられていた。そのことは、辞書類で裏付けられる。唐話辞書の場合「すぐに」類の訓と「そのとき」の訓が混在しているが、時代の流れにつれて「そのとき」に片寄っていく。日本の古辞書には訓が見られないので正確には分からないが、明治期の漢語辞書には「そのとき」の訓が多い。また、文学作品にも「そのとき」の例が多いことから、話題転換の方向に向っていたといえよう。しかし、管見では明治期中盤以降の例が容易には見られず、その姿を消しているようである。

この「登時」と類似した意味用法を持つものに「登下」がある。この「登下」は「水滸讀格」に登載されていないのみならず、「唐話辞書」にも見られない。小田切文洋の『唐話用例辞典』

にも登載されていない。では、中国ではどう用いられているのかを『漢語大詞典』の例からみると、①「登記與削除。猶増減」、②「上下、昇降」③「猶丰歉」の意味を與えていることがわかる。これを見る限り、「すぐに」のような意味や「そのとき」のような話題轉換の意味も全くない。『大漢和辞典』には「帳簿に記入することと帳簿の記入を削除すること」とあるので、やはり話題轉換の意味は全くない。『日国大』には見出し語として登録されていない。このことから考えてみると、中国では話題轉換語としては用いられていないことと、日本では中国のような意味では全く用いられていないことが窺える。では、辞書に登録されていないからといって、本当に日本ではその姿が見られないのかが問題になる。管見の「登下」の例は、以下の通りである。

そのときあけのすけはるかた
登下朱之介晴賢は、敵手あひての姓名記憶おぼえある、～(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、p38)1例

「登下」は、曲亭馬琴の『近世説美少年録』に見られる。その使用例は限られていて、今のところ近世の資料には見られない。「登下」には、中国の訓とは異った話題轉換の「そのとき」の訓を當てている。つまり、「登時」と同等の役割を担っていたことがわかる。近世の資料には稀であるが、近代の資料には以下のような例が見られる。

金箔ならざる地もなく、且登下の龍松竹梅、花玉、～(『東京開化繁昌誌』萩原乙彦、明治7年、明治文化全集8、p213)1例

将シ＝起来一場大笑フ－登下老婆将ラフ下キ＝一片白紙見フ～(『情天比翼縁』三木愛花、明治17年、国会図書館蔵本、p20)2例

漢文戯作や漢文小説にわずかながら「登下」の例があり、特に『情天比翼縁』にも「そのとき」という読みがあることから、やはり「登時」と同じ意味用法を持っていることがわかる。こうした例は、普通の文学作品にも見られる。

第五十六回 そのとき 登下ギルベルト復た打ち驚くかと思ひの外少しも周章る景色もなく～(『佛蘭西太平記』宮崎夢柳、明治17年5月、明治翻訳文学全集26、p115)1例

第六齣 東役所裁決の場 そのときしやうたらう 登下庄太郎は此裁判宣告このさいばんいひわたしを聞て胸塞りきい～(『何楼彼楼銭世中』宇多川文

海訳、明治18年4月、明治翻訳文学全集1、p253)1例

上の例は、話題転換の典型的な形である「章回」の最初に登場するものである。中国の意味用法とは全く異っているのが特徴である。

そのとき
登下龍馬は莞爾と笑ひ、じつこ斯く見露はされし上からは、(『汗血千里駒』坂崎紫瀾、明治15年6月、
明文全5、p164)1例

ソノトキ
登下主翁ハ自ラ迎ヘテ三人ノ壮士ニ打向ヒ～(『欧州奇聞花月情話』菊亭香水訳、明治17年2
月、明治翻訳文学全集1、p114)2例

そのとき
登下又も売酒婦は傍より軍曹に詞を添へ～(『佛国革命修羅の衢』柴瀾漁長訳、明治17年5月、明
治文化全集10、p177)23例

このとき
登下遙かに鞞音あつて此方に駟来るものと覚しく、(『緑叢談』須藤南翠、明治17年12月、明文
全5、p392)6例

そのとき
登下近傍の十窟より兩個の漢這出れば老翁は～(『佛乱余聞』無署名、明治18年11月、明治翻訳
文学全集24、p31)2例

しんたいきはま
進退谷つてぞ見えたりける登下輩の彼方より漕出したる～(『新粧之佳人』須藤南翠、明治20年
5月、リプリント日本近代文学135、p96)2例

あか
小座敷へ顔赧らめて入りにけり登下胸の轟きしは～(『小夜しぐれ』斎藤緑雨、明治20年11月、
斎藤緑雨全集5、p218)1例

この「登下」の次には登場人物の名前があり、そちらに目を向けさせる役割を持っている。このように、元来の中国の意味用法とは異なる語が、日本では話題転換の役割を担う借用字として用いられていたのである。しかし、これは日本人による誤用の可能性もある。「當時」と「登時」は発音も似ているし意味の上でも話題転換として重なっているだけに、次の章で述べる「當下」が話題転換の意味用法として用いられていることによる混同があったのではないかと思われる。

3. 「當下」について

「當下」は『水滸伝字彙外集』の「水滸読格」にも用例があるので、日本では近世に話題転換語としての認識があったように思われる。この「當下」についての先行研究は見られない。但し、小田切文洋¹⁶⁾の用例集には「當下」の欄が見られる。そこでは「すぐに。ただちに。ちょうどその時に」の意味を與え、『紅樓夢』や他の中国文献、唐話辞書、いくつかの読本資料、『新斥繁昌記』(1859)、『一年有半』(1901)の例を載せている。『日国大』には、「ただいま、目下」の意味で『談義本・田舎荘子』(1727)、『江戸繁昌記』(1832—36)、『二日物語』(1892—1901)、『水滸伝』の例が挙げられている。「當時」も「當下」の「當」の発音により意味が異ってくるようである。『漢語大詞典』によれば、「當下」は「立即・立刻」の意味で『三国志』以後の例が見られる。しかし、これは中国語の四声の場合であって、一声になると「那个时候」とある。つまり、「そのとき」の意味で『驚世通言』や『紅樓夢』の例が挙げられているのである。「當下」は、外にも『明清小説辞典』(花山文芸出版社)に「此時」の意味で『紅樓夢』の例が見られる。

このような現象は「當時」も同じで、それについては小田切文洋の意味説明のところにも見られるが、発音によってその使い分けをしていた。また、「當時」の歴史的展開や意味用法については遠藤好英¹⁷⁾の語誌に詳しい。ただし「その時」の意味用法には「話題転換語」という用語は用いていない。この「當下」は、中国の歴史からいっても非常に新しい語であることがわかる。「當下」がどのように用いられていたのかを調べるために、先ず中国の文献を見てみよう。

他那箇當下自散了、(『朱子語類1』中華書局、p47)

當下上至住持真人、(『水滸伝』施耐庵、世一、第1回)

話説當下宋江在筵上对衆好漢道、(『水滸伝』施耐庵、世一、第42回)

當下衆強盜取^リ出^シ火種^ヲ、(『勸懲繡像奇談』服部撫松、明治16年、国会図書館蔵本、p3ノ6)6例

當下父子傷感、自不^ニ必^シ説^ハ、(『小説粹言』平安奚疑主人訳、宝暦8年、東北大学図書館蔵本、p3ノ12)15例

如^シ此甚好。當下説^ニ了些^ノ生^ノ意的^ヲ勾^フ當^ヲ、(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p18)15例

16) 小田切文洋(2008)『唐話用例辞典』笠間書院、pp.115-116

17) 遠藤好英(1983)「とうじ(當時)」『講座日本語の語彙11』明治書院、pp.31-41

當下喫^マ完酒飯^マ、劉公又~(『小説奇言』岡白駒、宝暦3年、p284)7例

救^ヒ了性命^マ當下^{シテ}对^マ舜英^マ道(『五色石』服部撫松訓訳、国会図書館蔵本、p4ノ17)58例

當下^{ソノトキ}只氣^{イカラシメ}得個秋公。(『今古奇観』宮原民平、大正15年、支那文学大観11、p18)17例

日本で多く読まれた中国の小説にも「當下」の例が見られる。ここで無訓の場合はどのように解釈したのか分からないが、訓がある場合は「ソノトキ」とある。つまり、「すぐに、ただちに、ただいま」よりは話題転換としての意味用法となることのほうが優勢だといえるのである。「登時」も唐話辞書に登録されていたが、「當下」も見られる。

『語録字義』(元禄7年)

當下 アタルシタナレハソノママト云義也

『俗語解』(刊行年刊未詳)

當下 ソノトキ ^{タンスウ}當時 ソノトキ

『字海便覧』(岡島冠山、享保10年)

當下トハ、ソノトキト、云フコトナリ

『語録訳義』(延享元年)

當下 ソノママト云コト或ハ合下ト同シサシアタリ目前ノコト便ニ云ソノトキト云コトナリ

『中夏俗語藪』(天明3年)

目今 タダイマ。當下 同。當時 同。雅語ニテムカシノコト。

『怯里馬赤』(天明4年)

當時 當下 並ニタダイマナリ

『助語審象』(三宅橘園、文化14年)

當下 ソノトキ

『徒杠字彙』(安政7年)

當時 タダイマ。當下 同上。

『訳通類略』(明治年間写本)

當初 ソノカミ 當下 同 當時 同 初時 同

『雅俗漢語訳解』(市川清流、明治11年)

^{タウカ}當下 ソノトキ

『小説字林』(明治17年)

^{タウジ}當時 タダイマ又ソノトキ。^{タウカ}當下 同上。

『魁本大字類苑』(谷口松軒編著、明治19年)

^{ソノトキ}
登時、就時、即時、當下。

『支那小説字彙』(藤井理伯算輯、明治43年)

^{タウ カ}
當下 ソノトキ 當時 ソノトキ

上の例からわかるように、「當下」は基本的に「當時」と同じ意味である。『魁本大字類苑』の場合には「登時」まであって、この3語は同義または類義的成分を持つものと考えられる。その意味には、「ソノママ・ソノトキ・タダイマ・ソノカミ」がある。明治期になると「ソノトキ」の意味で用いられることが多くなる。この「當下」は、當然ながら『水滸伝』関係の辞書にも見られる。

『水滸伝訳解』(享保12年)

當下 ソノトキ、下ハ助字

『忠義水滸伝解』(陶山南涛、宝暦7年)

^{タンスウ}
當時 當下ト同シ只今ソノ時ナリ雅語トハ大ニ違フ

『忠義水滸伝考』(刊行年刊未詳)

當下 ソノトキナリ

當下 ソノ時ナリ

上の辞書ではすべて「ソノトキ」と訓じている。『忠義水滸伝解』の解釈には、「當時」と「當下」は同じであることと、雅語とは大いに違うということが述べられているが、これは「すぐに、即座に、即時に」の意味ではないことを意味していると思われる。要するに、この時期の「當時・當下」が話題轉換の役割を担う語であることを示している。「當下」は中国でもかなり新しい語であったし、日本でも近世以後の資料に見られるのであるが、形としてだけなら中世の辞書にも現れている。

『運歩色葉集』(1547年、静嘉堂文庫蔵)

^{タウ ゲ}
當下 又峠

『弘治二年本節用集』

^{タウ ゲ}
當下

中世の資料では、「峠・タウゲ」の意味として一種の當て字のように用いられていたように思われる。『弘治二年本節用集』には訓がないので正確には把握できない。近世の『合類節用集』や『書言字考節用集』にはその用例が見られない。明治期の漢語辞書では、以下の資料に見られる。

『画引早引自由熟字在』(大館正材編輯、明治11年5月、明治期漢語辞書大系34)

^{タウ カ}
當下 ソノコロ

『雅俗漢語字引大全』(中田幹母、明治18年9月、明治期漢語辞書大系43)

^{タウ カ}
當下 ソノトキ

明治期の漢語辞書では、上の2種にしか見られない。その意味が「ソノコロ・ソノトキ」となっていることから、明治期の知識人の「當下」に対する認識は話題転換であったといえよう。このように、中国俗文学で用いられていた「當下」は、日本では俗語としての認識が唐話辞書にも掲載されていた。漢語辞書にはわずか2種類にしか登場していないので、漢語としての認識は弱かったといっているまいだろう。では、日本の文学作品にはどう現れていたのかを見てみよう。

當下ソノトキ周防侯坐マ廳大ニ罵シ術院毎ヲ説道フ(『平安花柳録』快活道人纂定、享保6年以後?、p6ウ)3例

當下ソノトキ対師直曰ク(『国朝紀事』樊世輔、寛正6年、p29上)5例

日本人作白話小説には、「登時」と共に「當下」も用いられていた。しかし、わずか二つの作品にしか見られないので、必ずしも人気のあった語とはいえない面もある。

～包ホウ大爺タイノ府中ノに到キリ事ノ子細ヲ訴ヘケルトキ當下ソノトキ包公告状ヲ見テ(『通俗孝肅傳』紀滝淵訳、明和5年、近世白話小説翻訳集2、p506)3例

當下ソノトキ保児ヲ叫ビテテ劉四媽ヲムカヘ前楼ニ請シテセウ(『通俗繡像新裁綺史』睡雲菴主訳、寛政11年、近世白話小説翻訳集4、p285)5例

當下ソノトキ王臣ソウ早飯ハクヲ喫シ房錢ヲハラヒリ行李ヲ荷セ、(『通俗醒世恒言』宿屋主人訳、寛政2年、近世白話小説翻訳集4、p21)8例

身ノ藍樓却テ乾浄ミ ランル カヘツ カンシナカサツハ)ナリ當下楊巡檢活仏ソノトキ ヲフツバ(イネト)ヲ見ルガ如クコト~(『通俗平妖傳』本維芳訳、享和2年、近世白話小説全集、p194)5例

中国の俗文学を近世の日本人に読みやすく提供するための通俗物が多く刊行される。この通俗物は、唐話の知識が全くない人に読ませるものであるため、当時の漢字表記をしたり仮名書をすべきだと思われる。多様な話題轉換語のうち「當下」が用いられているが、ここでは借字の形であり、すべて「そのとき」や「そのかみ」の意味を當てている。

當下山下柵左衛門そのとき やましたさくざゑもんは、箭をおひ、弓を挟みて、(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本1冊、p41)23例、2冊45例、3冊48例、

當下一角そのときいっかくが左右なる、月叢団吾つきみのだんご、~(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本4冊、p298)4冊28例

當下阿蘇の大宮司そのときは、出迎へ席いでむかを儲まうけて、茶を薦めすす~(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集83、p61)163例

當下為朝そのときためともは。八代に酌やつしろをとらせ。(『椿説弓張月』曲亭馬琴、文化4年一文化11年、岩波文庫上巻、p66)43例

當下棗沢そのときは。臥ふしたる丐兒かたみを。と見かう見て。(『頼蒙阿闍梨恠鼠伝』曲亭馬琴、文化5年、古典叢書滝沢馬琴5、p153)1例

當下兵衛そのときは。ものをもいはで我子の頭髻わが こ たぶさ ひきを引つかみて。(『松染情史秋七草』曲亭馬琴、文化6年、古典叢書滝沢馬琴5、p197)14例

叮嚀ねんごろ もてなしに欸待そのときけり。當下半之進はんしんは懷ふたひらより、二枚あまりつぎあはしたる昏かみに、(『三七全傳南柯夢』曲亭馬琴、文化5年、日本名著全集読本集。p711)14例

當下母屋そのときおもやは浄手ちやうづしはてて、衣きぬの結つまとり、縁えんが頬はより、~(『開巻驚奇俠客傳』(曲亭馬琴、天保3年、新日本古典文学全集87、p47)54例

當下はしごそのときの音おと、トントンと聞きて、下したより来きる女房さむらお沢さわが、(『閑情未摘花』松亭金水編次、天保10-12年、日本名著全集人情本、p718)13例

「登時」は曲亭馬琴のわずかの資料に見られたのみであってが、「當下」のほうは馬琴の

種々の読本資料に見られる。岩波文庫本(10冊のうち1—4冊の例を見た)の『八犬伝』には144例も用いられている。その他の資料にも多くの用例があることから、曲亭馬琴は「當下」の語をかなり好んでいたものと思われる。勿論、すべて「そのとき」の訓をあてていて、話題転換の役割を果たしている。稀に人情本の資料にも見られ、「登時」よりは広い範囲で用いられていることも確認できた。

當下^ツ街間^ニ一婢携^ハ竹籃^ヲ一呆々^リ來^リ(『江戸繁昌記』寺門静軒、天保3年、東北大学図書館蔵本、p5ノ33)2例

血涙^ツ滿^リ地^ニ當下^ニ我作^{スモ}閻魔面^ヲ-(『繁昌後記』寺門静軒、明治10年、東北大学図書館蔵本、p3ノウ)7例

乃ち奉納所は御供所と共に、宮殿の北方にあり。當下^{このとき}扨殿の鈴の声カラカラカラ。(『東京開化繁昌誌』萩原乙彦、明治7年、明治文化全集8、p217)2例

當下^シ看^ス了^シ那処女^ノ好模様^ヲ-(『情天比翼縁』三木愛花、明治17年、国会図書館蔵本、p6)20例

漢文戯作や漢文小説にも見られるが、「登時」と同様にかかなり限られた作家の作品にのみ見られるのも特徴である。意味は「ソノトキ」が主流で、「コノトキ」が例外的に用いられている。この語は寺門静軒や三木愛花が比較的好んで用いていたようであるが、明治期には他の作家に「當下」の使用が見られず、使用上の偏りが見られた。次は普通の文学作品に現れている例を見ることにする。

第四十八回 當下^{そのとき}彼のヒウリインは心の中に思ふ様、~(『自由の凱歌』宮崎夢柳、明治15年8月、明文全5、p62)7例

第十二回 當下^{そのとき}兵庫は彼方^{ひやうご}と屹度^{かなた}打見遣り~(『小夜千鳥浪の音信』宮崎夢柳、明治16年6月、リプリント日本近代文学12、p34)7例

第二十五回 當下^{そのとき}ルイは暫らく^{しば}思案^{しあん}し誰人^{たれびと}にて何用^{なによ}あるか(『佛蘭西太平記』宮崎夢柳、明治17年5月、明治翻訳文学全集26、p49)3例

却説^{キヤクセツ}ス當下^{タク}タケ子ハ不意^カニ驚^{オドロ}キ首^{カウベ}ヲ回^{メグ}ラシテ之^コレヲ顧^{カミ}ルモ、陰雲^{インウンサンタンシ}慘澹^{セキ}咫尺^{オホ}ヲ蔽^カヒテ~(『訂正増補惨風悲雨世路日記』菊亭香水、明治28年11月、リプリント日本近代文学95、p100)1例

話題轉換語の典型的な特徴は「章」や「回」の最初に用いられることだと述べたが、「當下」にもそのような現象が見られる。明治期の作家は、「當下」についてもそのような認識ももっていたと思われる。また、二重的話題轉換語としての様相も観察される。たとえば、『訂正増補惨風悲雨世路日記』には「却説」とともに「當下」が用いられていたが、このような用法は他の話題轉換語にも多数見られるものである。このことから考えてみると、当時の文人は「當下」を使いこなしていたといえよう。

以下は、管見で調べた明治期の「當下」の例である。

そのときせきちう つら ところ つづきすんしう ものことば
 當下席中に列なる所の都筑駿州なる者辞を～(『近世奇聞(抄)』条野採菊、明治6年1月、明文全

1、p235)4例

いぬ 追れて あま、はふし むす かり ね ゆめそのとき
 ～犬に追れて尼法師と知つつ結んだ仮寝の夢當下能々見て置た～(『茨城阿滝紛白糸』土屋南翠
 著述、明治12年2月、リプリント日本近代文学92、p237)1例

そのときわれら ねけ もと へにしや もの
 當下我門も縛にはあひしかど、原素より経西の産ならず。(『哲烈禍福譚』宮島春松、明治12年
 5月、明治文化全集21、p213)13例

そのときいづみや しやうぎ をりきた らうにん とらじ らう まへ
 當下泉屋の床机より下り来りたる浪人は寅次郎が前に～(『蝶鳥紫山袖模様』高島藍泉、明治13年
 9月、明文全2、p170)3例

やくしやいは どうがそのころ こ(ワラス) しうぞく(ならひ)しゆんしゆ れい もつ
 訳者曰く當下 佛国 の習俗 呪手の禮を以て～(『五九節操史』松岡亀雄訳、明治14年2月、
 国会図書館蔵本、p3ノ26ウ)1例

そのとき のぶきよ しげ を ら うちむか ぼく ひさ め や
 當下また信清は滋雄等に打対ひ僕は久しく眼を病みて～(『浅尾よし江の履歴』古川魁蓄、明治
 15年4月、『明文全』2、p332)2例

そのとき いふ よ は すぎ
 當下バルサモーは又云よふ。短かき夏の夜分過て。(『西の洋血潮の暴風』櫻田百衛、明治15年6
 月、明文全5、p20)1例

ひ や そのとき おやぢ のりぢ
 「冷酒冷酒。當下おぼろ老爺は乗地になりて、(『清治湯講釈』中江兆民、明治15年9月、明文全
 16、p250)1例

そのとき か ほ あか かつおどろ かつわら
 當下マルツラバースは顔色を赧らめ且驚き且笑ひて～(『通俗華柳春話初編』織田純一郎、明治
 16年11月、東北大学図書館蔵本、p42)18例

～月更ラニ輝レルガ如シ當下露美雄ハ椅子ヲ離レテ私カニ美人ノ腕ヲ～(『欧州奇聞花月情話』
 菊亭香水訳、明治17年2月、明治翻訳文学全集1、p117)1例

それとはなしに身を転じ、窃かに四邊を見廻したり。當下そのときしろ後に声ありて。(『一滴千金憂世の涕涙』宮崎夢柳、明治17年3月、リプリント日本近代文学38、p12)1例

再び説く當下あ菊雄ハタケガ手書ヲ卷舒幾回漸クニシテ之ヲ収メ〜(『世路日記』菊亭香水、明治17年5月、明文全2、p365)6例

當下そのときゴーヴェン馬むまを飛下り傍そばの椅子いすに〜(『佛乱余聞』無署名、明治18年11月、明治翻訳文学全集24、p47)5例

家の人と心安きぞ知られたり、當下ソノトキトーントン婦人は、有りとあらゆる帽子の〜(『船遊』磯野徳三朗訳、明治19年5月、明治翻訳文学全集6、p12)1例

〜ト二個ふたりの婦人は互に意中の現象を写し出して語り合へり。當下このとき母垂卑斯アリスの声にて、〜(『想夫恋』佐野尚、明治19年10月、明治文化全集21、p593)1例

今また泣きて事実をあかし、夫とに小春を救へと乞ふ。當下そのとき治兵衛の心中に一私情と二公情と相闘ふ。(『天の網島』坪内逍遙、明治30年10月、逍遙選集8、p684)1例

身は當下そこに膾なとならばなれ、相応あはに多く刃やばの味も味ふて〜(『ひげ男』幸田露伴、明治29年12月、露伴全集5、p375)1例

作家によって使用頻度が異なるが、明治期には比較的多く用いられていたことを物語っている。音読の例は一つもなくすべて訓読をしている。「そのとき」が多数を占めていて、その他には『想夫恋』に「このとき」、『ひげ男』に「そこに」の訓があるのみである。これは、「當下」の受入れの歴史が短いことから日本人の読者には馴染まなかったためだと思われる。一方、当時の読者には難しいと思われる中国俗語を用いていたことは、英学の時代に入ったものの依然として唐話学の残影があったことを意味しているといえよう。しかし、あくまでも中国俗語の借用字として用いられていたのである。

中国語の四声で読むときの「立即・立刻」、すなわち「すぐに・ただちに」のような用例は今のところ見つかっていない。一方、一声で読むときの「那个时候」、つまり「そのとき」の意味と話題転換の用法のみが多用されていることが特徴である。小田切文洋の用例集に示されている「すぐに・ただちに」を表わす用例は殆んど見られない。

「當下」は「登時」に比べ使用範囲が広く多方面に渡って用いられているが、やはり今や死語となったものである。「當下」は近世の中盤辺りから用いられ、明治期には10年代に集中的に現れていた。「登時」も「登下」も同様に明治20年代以後その姿が消えたが、「當下」もそ

の命は短く、明治30年代以降は用いられなくなる。

「登下」についてももう一度言及してみよう。日本における「當時」の歴史は深く、新しく入ってきた「當下」とは意味や用法上の類似性があった。同じように、日本における「登時」の歴史は長い。「登時」の用法は「すぐに」から「そのとき」の方に移っていく。近世に「登下」の語が輸入されたが、もともと話題転換の意味用法とは性格が異なるものであった。それが、「當時・當下」のように「登時・登下」は同じ意味であると考えられ、それに伴い中国語とは全く異なる意味用法で誤用されるようになったのではないかと思われる。

この外にも、「そのとき」を表わす異様な漢字表記があるので紹介しておく。

ハハハ大笑ひだ。^{そのとき}當丁なるとになつて見てやりてへナア。(『閑情未摘花』松亭金水編次、天保10—12年、日本名著全集人情本、p726)1例

列を正して並居みなぎれたり。^{このとき}時下ときおき老翁おきなは起たちあがり、(『西の洋血潮の暴風』櫻田百衛、明治15年6月、明文全5、p13)1例

五十一回 ^{そのとき}首下むか伊織ありは兵庫むかに向ひ足下ごへんが年頃としごろ企くは図だてし陰謀いんぼう已すに露頭ろけんに及びおよび(『小夜千鳥浪の音信』宮崎夢柳、明治16年6月、リプリント日本近代文学12、p152)1例

茲ここにも一個ひとつの梯子はしごあり^{そのとき}常下じょうかラントナツクらうこうの老侯まは先まづ(『佛乱余聞』無署名、明治18年11月、明治翻訳文学全集24、p85)1例

「當丁・時下・首下・常下」が見られ、「そのとき・このとき」の訓を當てている。人情本の『閑情未摘花』の例は、厳密には、用法上話題転換ではない。明治期の用例は明らかに話題転換の用例である。『漢語大詞典』には「當丁」「首下」「常下」の例はない。「時下」には「眼下・現在、一時」の意味を當てている。『大漢和辞典』にも「時下」のみが登載されていて、「この頃・このせつ・いま・ただいま・目下」の意味を當てている。このように、「そのとき」にあたる漢字表記の多様性も見られる。

4. おわりに

本稿では、話題転換語の一種である「登時・登下・當下」について具体的に調べてみた。

これらの語は、中国に根拠を持つ語である。「登時」「當下」は中国俗語の性格を持つもので、話題転換語として中国の俗文学に多用されている。一方、「登下」は意味の異なる、話題転換とは別の語であった。

日本の場合はどうであったのかを、ここでは便宜上「登時・當下・登下」の順に整理してみたい。

「登時」は、早い時期に受け入れられている。日本の古辞書や、近世や近代の唐話辞書、それから明治期の漢語辞書にも登載されていて、日本人には比較的知られている語であるかのように見える。しかし、文学作品においては低頻度の語であるし、使用範囲もそれほど広くない面があった。主として「すぐに・ただちに」の意味で用いられていたものが、近世の唐話学の流行により、「そのとき」という話題転換の意味への意味用法上の変化がみられるようになった。「登時」は、わずかながら音読の例もあるが殆んどが訓読であり、明治20年代を境として見られなくなる。『日国大』に「そのとき」のような話題転換語としての意味用法を與えていないのは問題である。

「當下」は「當時」と同じもので、発音により意味が異なっている。「當」の音が中国語で一声であるときに「そのとき」の意味になり、四声のときは「すぐに・ただちに」の意味になる。日本における「當時」の受容は早いですが、「當下」は近世以降の資料に見られる。中国においても非常に新しい語である「當下」は、唐話学の影響で受容され話題転換語として用いられていた。日本では殆んどが「そのとき」という意味の話題転換語として用いられている。「登時」に比べると比較的用例も多く、多様なジャンルにわたって用いられているのが特徴である。しかし、受容の歴史が浅いためか、音読の例はなく訓読の例のみである。この語は、明治30年代を境に見られなくなっていて非常に短命であった。『日国大』における「當下」の意味として「その時」を與えていないことには、やはり問題が残る。

「登下」は、中国と日本での意味用法が全く異なる例である。『漢語大詞典』の見出しでみたように、話題転換とは無関係のものである。日本ではどうして話題転換とは全く異なる「登下」を「そのとき」の意味で用いたのかについては明らかでない。ただし、一つの可能性として、「當時」と「當下」が類似性をもっていることから、近世に入ってきた「登下」も「登時」と類似性を持っていると考えて話題転換の意味で用いたというふうに推測してみることはありうるかと思われる。しかし、あくまでもこれは可能性であって確かではない。資料の限界があつて問題が残るところであらゆる文献を調べたら、中国本来の意味で用いられている例も見つかるかも知れないが、現在のところは見當たらない。『日国大』には、訓読で用いられていたせいが見出し語として登録されていない。

このように、中国俗文学で用いられていた語が近世や近代の日本文学にも援用されていた。中国俗語の受容により漢字表記の多様化が促進されていたことも窺えたし、中国俗語の流行ぶりやその変容もわかった。それに、一語の受容、伝播、消滅にいたる歴史的展開も把握できた。

【参考文献】

- 遠藤好英(1983)「とうじ(當時)」『講座日本語の語彙11』明治書院
 岡田袈裟男(2006)『江戸の翻訳空間』笠間書院
 小田切文洋(2008)『唐話用例辞典』笠間書院
 香坂順一(1987)『《水滸》語彙の研究』光生館
 鈴木真喜男(1976)「『登時』と『當時』と『輒時』—讃岐典侍日記のばあい—」『東京学芸大学紀要』第2部門27
 松尾良樹(1986)「『万葉集』詞書と唐代口語」『敘説』13
 _____(1987)「『日本書紀』と唐代口語」『和漢比較文学』3
 羅工洙(2005a)「馬琴作読本における中国俗語的話題轉換語」『日語日文学研究』第53輯、韓国日語日文学会
 _____(2005b)「日本における中国俗語的話題轉換語『去説』」『日本語文学』第26輯、韓国日本語文学会
 _____(2006a)「近世・近代における『話説』と『説話』」『日語日文学研究』第56輯1巻、韓国日語日文学会
 _____(2006b)「日本における『閑話休題』とその周辺」『日本語文学』第29輯、韓国日本語文学会
 _____(2008a)「日本の近世・近代における『再説』と『且説』」『日本語文学』第37輯、韓国日本語文学会
 _____(2008b)「近世・近代における話題轉換語の諸相」『東北亜文化研究』第17輯、東北アジア文化学会

논문투고일 : 2014년 06월 10일

심사개시일 : 2014년 06월 20일

1차 수정일 : 2014년 07월 09일

2차 수정일 : 2014년 07월 15일

게재확정일 : 2014년 07월 20일

〈要旨〉

近世・近代における話題転換語の「登時・登下/ 當下」について

日本の場合はどうであったのかを、ここでは便宜上「登時・當下・登下」の順に整理してみたい。

「登時」は、早い時期に受け入れられている。日本の古辞書や、近世や近代の唐話辞書、それから明治期の漢語辞書にも登載されていて、日本人には比較的知られている語であるかのように見える。主として「すぐに・ただちに」の意味で用いられていたものが、近世の唐話学の流行により、「そのとき」という話題転換の意味への意味用法上の変化がみられるようになった。

「當下」は「當時」と同じもので、発音により意味が異なっている。「當」の音が一声であるときに「そのとき」の意味になり、四声のときは「すぐに・ただちに」の意味になる。日本における「當時」の受容は早いが、「當下」は近世以降の資料に見られる。中国においても非常に新しい語である「當下」は、唐話学の影響で受容され話題転換語として用いられている。日本では殆んどが「そのとき」という意味の話題転換語として用いられている。

「登下」は、中国と日本での意味用法が全く異なる例である。「漢語大詞典」の見出しでみたように、話題転換とは無関係のものである。日本ではどうして話題転換とは全く異なる「登下」を「そのとき」の意味で用いたのかについては明らかでない。ただし、一つの可能性として、「當時」と「當下」が類似性をもっていることから、近世に入ってきた「登下」も「登時」と類似性を持っていると考えて話題転換の意味で用いたというふうに推測してみることはありうると思われる。

Conversion of the topic words 「Tou-ji, Tou-ka」 in the early modern period

I will examine these words/phrases in the following order 「登時・當下・登下」.

“Touji (登時)” was prevalent from the early period in Japan. We can find this word in classic Japanese dictionaries, in pre-modern and modern Chinese dictionaries, and in Kanji dictionaries of the Meiji Period. It was relatively well-known by Japanese speakers, and basically carried the meaning “immediately”. However, it appears that it underwent a transformation to become the “Topic conversion” marker - meaning “then”, under the influences of the pre-modern “Chinese Linguistic study.

“Touka (當下)” is essentially the same as “touji(當時)”, although it takes on a different meaning depending upon its pronunciation. When you say “Tou(當)” using the First Tone (一声/Yisheng), the meaning is “then”; but when you use the Fourth Tone (四声/Sisheng), the meaning becomes “immediately”.

The meaning of “touka(登下)” in Japan, (which was quite novel even in China) came to be “then” under the influences of “Chinese Linguistic study (唐話学)”. Compared with “touji(登時)”, “touka(當下)” has been used in various ways. The usage of “touka(當下)” is an outstanding example of difference between China and Japan.

As this paper examines in detail the index of “Kango-daijiten『漢語大詞典』”, the differences has no relevance to the “Topic conversion”, and it is unclear why “touka(登下)” in the Japanese language had been used with the meaning “then”. However, it might be considered that Japanese people used it as the “Topic conversion”, because they noted the similarities between “touji(當時)” and “touka(當下)”.